

# 跡見花蹊と大和田建樹の親交

## — 「鉄道唱歌」と跡見校歌「花桜」を結ぶ謡曲「碓引」 —

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 観光デザイン学科 元教授

小川 功

### 1. はじめに

世に「鉄道唱歌」作詞者として知られる大和田建樹が跡見学園と深い因縁があることを筆者が知ったのは不覚にも赴任後のことであった。式典で斉唱される明治調の古色蒼然たる校歌「花桜」の「学びの庭に咲きにほふ やまと心の花ざくら」ではじまる歌詞が妙に気に入り、配られた歌詞の中に大和田の名を見出した時の驚きは忘れられぬ。それほど鉄道愛好者にとって彼の名は有名を通り越し、“聖人”<sup>1)</sup> 視される存在であったからである。

「鉄道唱歌」の正式名称は「地理教育 鉄道唱歌」であって、「観光地理学」を重要科目に据える観光デザイン学科教員であった者として、大和田を大先輩に戴けたことは退職後といえども大変名誉なことと感じる。従来、事情不案内な筆者は大和田の名声・識見を学祖・跡見花蹊（以下単に花蹊と略）が評価、看板教員として招聘<sup>2)</sup> したものと単純に解していた。しかし大和田の招聘時期は明治（以下年号は略）32年9月で、『鉄道唱歌 第一集』発売開始の半年も前であった。本稿では花蹊と大和田との親交を上記の鉄道唱歌、跡見校歌、それに従来注目されなかった謡曲「碓引」という彼の手になる三つの歌曲を手がかりに花蹊「日記」<sup>3)</sup> から紐解いてみたい。

初期の跡見女学校卒業生・岡本かの子（40年卒）の証言に「跡見女学校はその昔倫理科に論語を用い、国語科は大和田建樹先生の源氏物語などが課せられ」<sup>4)</sup> たと大和田の名が登場する。先行研究者・植田恭代氏は33年頃までに跡見女学校に在籍した教員として与謝野寛、落合直文、増田于信、服部躬治、生田目経徳とともに、本稿の大和田建樹を挙げ、「跡見女学校には三十二年から出講し四十三年三月に辞任」<sup>5)</sup> したとされる「国文学者で、本学園校歌を作詞した詩人」<sup>6)</sup> と指摘する。また植田氏は別稿で学祖「花蹊の日記にすべての教員の出入りが記されているとはかぎらない」<sup>7)</sup> と指摘しつつも、「跡見女学校に関わった教員で、これだけ記述量の多い教員は珍しい…落合直文の存在が跡見にとってそれだけ重要であったことを物語っていよう」<sup>8)</sup> と指摘する。

筆者は今回花蹊の日記に頻出する大和田も落合に準ずるような存在ではなかったかを問題提起してみたい。何故なら42年5月9日学校創立二十五周年の祝賀会の際に千人を超える参列者の中、古希を迎えた本人の「花蹊式辞」の次に「職員総代大和田建樹祝辞」（日記三,p458）を述べ、事前の4月16日花蹊の所に「大和田氏来り、大会の相談する」（日記三,p454）という重要な立場にあったと思われる故である。

### 2. 跡見花蹊「日記」に登場する大和田の動静

大和田の教員経歴として一般に知られるのは17年 東京大学古典講習課講師、19年東京高等師範学校教授、24年教職を辞し文筆家となるまでである。その後33年『鉄道唱歌』全五部作を発表するまで、25年出講の明治女学校、青山女学院、雙葉高等女学校、跡見女学校などの女学校や、早稲田中学校などの各校講師を歴任した模様だが、出講年月は必ずしも審らかではない。そこで、何かと世に謎めいた印象<sup>9)</sup> を与えている大和田の特に『鉄道唱歌』発表前後の具体的活動<sup>10)</sup> を明らかにしたいと考えた次第である。

花蹊「日記」に登場する大和田の動静としては管見の限りで[表-1]のような来訪および金銭等の授受等が相当数記録されている。初出と思われる記述は32年9月14日「此度属託する大和田建樹、今日より教授せらる」（日記二,p599）である。嘱託開始に先立つ記録は見当たらないが、1月前の8月14日「…来客<氏名欠>」（日記二,p593）と匿名の来訪記載もあるので、このあたりに特に名を伏せて面談していた可能性もあろう。こうした花蹊と大和田との関係は43年10月1日「…本日午前十一時大和田氏死去」（日記三,p586）10月4日「大和田氏葬式ニ付、李子、石山氏送る」（日記三,p587）までの約10年間に及ぶ。

金額の大きい贈答として34年7月31日「大和田氏へ金拾円、かたひら一反を贈る」（払方摘要、p720）件がある。翌8月大和田は大ヒットした一連の鉄道唱歌の祝賀会を郷里の宇和島で開催した。（中村,p243）時期的な近さから、この祝賀会へ向けたお祝いとも想像されるが、前後を含め日記の記述に「鉄道唱歌」云々の字句は一切見当たらない。関係者間で周知のことゆえ省略<sup>11)</sup> したのか、大和田側でも当時世間の大評判を“虚名”として嫌っていたためか判然としない。

35年頃まで頻発する花蹊からの大和田への出金の多くは、33.1.11「大和田氏稽古始をなす」（日記二,p619）と、出金が

始まる3.22「大和田氏、三円」（弘方摘要、p626）との時期的対応から考え、定期的な謡曲稽古への謝礼とも考えられる。卒業生も「古い英国風の校舎の建物に続く日本風の平屋には、お師匠様の謡曲のお声等ときどき聞きました」12）と回顧している。

34.5.17「三時半より素謡会をなす…大和田氏帰られて後、また松風」（p706）との記述は「先生…お構ひなくサツサと謡って今日はここ迄だと打切る」（昭和9年6月21日朝日夕④）と言われた大和田の教授ぶりを彷彿とさせる。シテを演じた“売れっ子”大和田が多忙を理由にサツサと帰った後の自習を友人・家人らと継続したのであろう。しかし日露戦争下の歌舞音曲類の自粛ムードの反映か、37.2.4「謡曲稽古相断る。時局から能見物もみな廃したり」（p86）とあり、これ以降大和田への出金はほとんど姿を消していることも一つの証左である。

### 3. 跡見「校哥」誕生までの筆者なりの仮説

跡見学園歌としての「花桜」に関する公式の記述として花蹊は跡見の校歌の作詞を高名な文学者に委嘱、「花桜」は、花蹊という号にちなんで作詞され、当時の卒業式で歌われて以来、跡見学園歌として今日まで歌いつかれてきたとされる。管見の限りでは校歌「花桜」が初めて確認できるのは明治34年4月1日第13回卒業式である。しかし、この時は「校歌合奏（花桜）…校歌合奏（学の窓一教の場）」13）と3曲の校歌の鼎立期で、先行する花蹊作歌・多久毎作曲の学びの窓、教への場、春の朝の三校歌に、いわば第四校歌としての花桜が付け加えられた背景が解明されねばならない。

33年4月1日の第12回卒業式では単に「校歌合奏」（汲泉1号,P134）とあるだけで、日記にも校歌の文字は見当たらない。しかし僅か8日後の4月9日「…余、六十一歳の誕生日二付、其祝のしるして、三時業畢而より講堂の楼上ニテ御花見を催す。生徒一同、君が代、校哥をうたふ」（p629）との記述がある。日記の記述は「校歌」でなく「校哥」であって、花蹊はあえて「歌」の古字「哥」を用いる。「大君のおほみこと…み国のみため」との「学の窓」の堅目の歌詞よりも、大和田による花桜「学びの庭に咲きにはほふ やまと心の花ざくら」、「もゆる草葉の野べひろく…花のしたみちあととめて なほ分け入らむ奥までも」と表現された詩的情景こそ、「花のしたみち」＝花蹊の数え年61歳の誕生日14）を生徒一同らが祝う校内の花見で、花蹊自身が日記で描写した生徒「一同楼を下りて、園中隊をなして唱哥す」（p629）る教員と生徒が一体となってこやかに唱和する微笑ましい光景に、より相応しいのではなかろうか。筆者の想像にすぎないが、大和田が主に花蹊61歳の誕生日を祝う私的行事の意味も含まれた、華麗な「御花見」の“目玉”曲という趣旨で作詞し、生徒一同が校内の花桜の下で喜々として合唱したのが現行校歌のそもその発端とは考えられないであろう。

花蹊の誕生日を祝う行事としては26年4月9日の日記に「此日、誕生日二付、園遊会ヲ執事…実賑々敷事、盛大々々」（p184）とある。しかし30年4月9日の日記には「余の誕生日…本年ハ何も素質にて、誕生日の祝ひも先來月のつもり也」（p446）と延期、5月8日の日記に「明日は余の誕生日にて生徒打寄、その祝のため園遊会を催ほさんとて、一同こぞりてその準備をなす」（p452）とある。これらの記述を総合すれば、花蹊の誕生日を祝う園遊会が今日の“学園祭”の如く定着しつつあり、開催する主体は建前上はあくまで生徒一同であったと思われる。純粋に生徒一同の発願だけかどうかは別として、人生の大きな節目でもある61歳の誕生日を祝う趣向として花蹊の号に因む唱歌を当日のプレゼント的位置づけで生徒一同が喜んで唱って聞かせた可能性が高い。また、それ故に花蹊自身もサプライズに感激、この「新曲」を現行「校歌」並みに評価、「校哥」という字を宛て日記に記したのであろう。

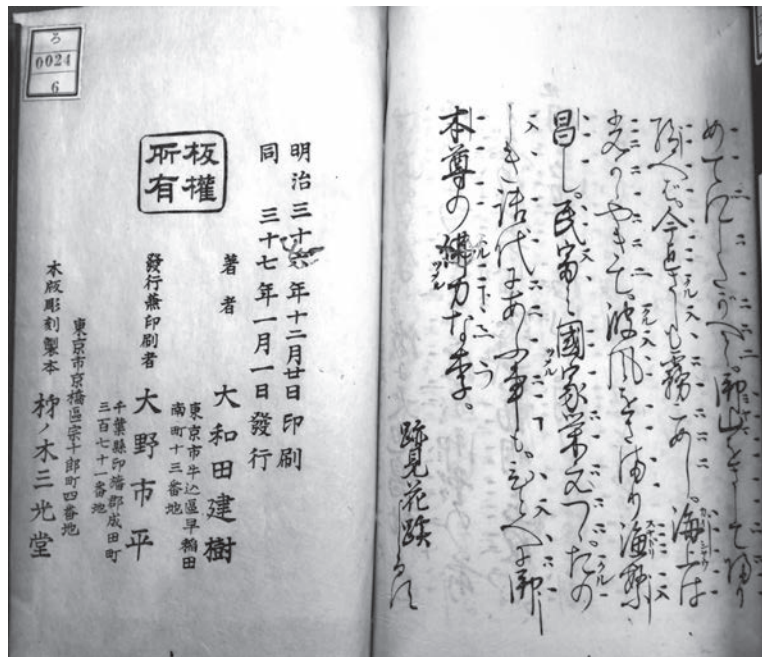
果たして生徒一同から頼まれたのか、進んで買って出たか不明ながら、当時花蹊が「大和田氏稽古始をなす」（p619）など急速に公私共に花蹊との親交を深めつつあった大和田に得意中の得意技15）たる作詞の大役が回ってくるのは極めて自然に思われる。

翌34年1月8日「当年ハ教員たちも招待」した始業式で『汲泉』では「始業式…校歌合奏」（汲泉3号,P159）と、どの歌か特定できないが、日記では「としの始の辞を朗読す。畢而校哥を唱ふ…賑々しくも式も相済」（p684）と例によって「哥」の方を用いている。恐らく花蹊自身が自作よりも花桜を甚く気に入った結果、「教員たちも招待」した始業式という公式行事で斉唱する校歌に採用を決め、4曲の校歌併存時代を経て次第に花桜のみが正式の校歌として定着、これ以降120年近く学園内で唱われ続けたのではなかろうか。

### 4. 謡曲『碇引』に見る花蹊と大和田の関係性

筆者の仮説に過ぎない上記の推論を補強するだけの証拠を挙げられないので、両者の親交を裏付ける挿話で幕としたい。筆者の仮説では誕生日の祝い歌(?)を贈られた形の花蹊としても心情的には作詞した大和田に対して何らかの私的なお返しをすべき立場にあることになる。この貸借関係清算の脈絡において、筆者は以下の謡曲『碇引』の揮毫を位置づけてみたいと考える。

専門雑誌に「碓引（新著謡曲）一冊  
右は成田不動尊縁起功德を本とし大和  
田建樹氏の作られたるものにして跡見花  
蹊女史健筆を揮はれ近来珍らしき新謡曲  
なり、発行者は千葉県成田町大野市平、  
製本所は東京市京橋区宗十郎町柿ノ木  
三光堂なり」16) と紹介されている。  
36年12月20日印刷、37年1月1日発行  
の謡曲『碓引』は大和田が門前・大野  
屋を定宿に「謡曲仕舞等をも伝習」する  
成田「有志者は紀念のため（大和田）  
氏に謡曲の新作を請ひ…碓引と名づけて  
不動尊前に奉納」（明治37年1月20日  
朝日④）した「成田山不動明王のご縁起  
と霊徳を述べた」17) 謡曲である。旅  
好きの大和田が幾度も成田を訪れ、「此  
地謡曲家の集まり」である「瓢声会の連  
中十人あまり集まるるとて招か」18) れ、  
主宰者・大野屋旅館19) に度々長逗留したことは紀行文からも窺える。



[写真-1] 大和田建樹作『碓引』（初版本・成田山仏教図書館所蔵）

「碓引 大和田建樹作 仏の御名もう古支奈起…」で始まり、[写真-1]のように最終頁には「天地鳴動して、不動明王出現し給い」20)、「飛とへル御本尊の仏力な李。」と成田不動尊の功德を称えて「碓引」は幕となる。文末に「跡見花蹊する須」と揮毫者名が明記されており、「跡見花蹊女史の浄書により一部の謡曲として発行」（明治37年1月20日朝日④）との報道を裏付けている。

[表-1]には大和田からの花蹊への受取として36.9.14「大和田氏、十円」（“受”方摘要、日記三、p52）という例外的存在がある。おそらく明治37年1月発行の『碓引』の揮毫に関連21) したものと想像される。

大和田から十円を受領した9月14日に近い9月5日（土）「朝起きて揮毫にかかる」（日記三、p51）。9月6日（日）「終日揮毫する…此夕、多氏横笛持参り、月に対して笛をふく。音もすみわたりて心も清くたのしき夜也」（日記三、p51）とある。特定はできないが、大和田からの依頼の「碓引」揮毫のため、折角の土日まるまる返上して奮闘した花蹊が、仕上げた後に、新旧の校歌作曲者でもある跡見講師・多久毎22) から指導を受け笛の演奏を心から楽しんだと想像される。

## 5. むすびにかえて

謡曲『碓引』は昭和50年「光輪閣落慶開帳記念」に、奉納を受けた成田山新勝寺の手により再刊23) された。かくして大和田建樹作、跡見花蹊浄書という本稿の主題を構成する謡曲本が今日でも広く流布することとなった。

鉄道唱歌の発想の原点は、能楽の「道行き」にあると考えられる。能の「道行き」は短い詞に道中の地名を連ねて詠み込み、メロディに乗せて謡うもの。それぞれの土地の地理的位置づけを観客に事前に想像させる能舞台ならではの演出とされる。

能楽に造詣が深い大和田建樹が、能の演出の「道行き」を地理教育に応用するのは極めて自然であろう。

今回は花蹊と大和田との親交の基盤が鉄道唱歌でなくむしろ能楽にあり、その象徴としての謡曲『碓引』の成立経緯を取り上げた。とはいえ両者の親交は単に能楽での師弟関係のみにとどまるものではあるまい。紙面も尽きたので、旅行特に鉄道旅への両者の嗜好の合致に関する試論に関しては幸いにして機会を与えられれば稿を改める所存である。

[表-1] 花蹊と大和田との交際記録

32.12.1「大和田氏来る」（日記二<以下略>、p609）

33.1.11「大和田氏稽古始をなす」（p619）

33.3.22「大和田氏、三円」（弘方摘要、p626）

33.4.1 第12回「卒業式…校歌合奏」（汲泉1号、P134）

33.4.9「…余、六十一歳の誕生日ニ付、其祝のしるして、三時業畢而より講堂の楼上ニテ御花見を催す。生徒一同、君が代、校哥をうたふ…一同楼を下りて、園中隊をなして唱哥す」（p629）

33.5『鉄道唱歌 第壹集』刊行

- 33.6.1「大和田氏へ五円」(弘方摘要、p638)
- 33.6.28「大和田氏、五円」(弘方摘要、p642)
- 33.9.5『鉄道唱歌 第貳集』刊行
- 33.10『鉄道唱歌』第五集刊行
- 33.10.4「大和田氏来」(p663)
- 33.10.25「来客、石山すま子、大和田氏、駒女、素謡会す。千手 桃子、弱法師 すま子、鉢木 花、きぬた独吟 大和田。済て、すま子、駒、一宿」(p666)
- 33.11.12 校友会誌『汲泉』2号に「校歌 学びの窓 跡見花蹊作歌 多久毎作曲」「教への場 同上」「春の朝 同上」楽譜・歌詞掲載。
- 33.12.11「来客、大和田」(p671)
- 33.12.25「素謡会ニ付、午下一時始にて、講堂第二教室にて、熊野 能 シテ大和田氏 ツレ桃子 ワキ愛治郎 はやし 羽衣 花 西王母桃子 山姥花  
畢而下座敷にて 田村 石山すま子 蟬丸 シテすま子 ワキ桃子 ツレ忠子 俊寛 花 三井寺 桃子  
畢而 晚餐を饗す。夜七時皆々帰」(p674)
- 34.1.8「始業式…当年ハ教員たちも招待す…畢而校哥を唱ふ」(p684)「始業式…校歌合奏」(汲泉3号,P159)
- 34.4.1 第13回「卒業証書授与式…証書を授く。畢而校歌を唱ふ」(p698)「校歌合奏(花桜)…校歌合奏(学の窓一教の場)」(汲泉3号,P160)と3曲鼎立
- 34.4.26「大和田氏来」(p702)
- 34.4.30「課業畢る。大和田氏へ五円」(弘方摘要、p704)
- 34.5.14「来客…大和田氏」(p706)
- 34.5.17「大和田氏、石山須磨子、岡崎忠子来られて、午下三時半より素謡会をなす。忠度 すま子 雲林院 桃子 小原御幸 花蹊 杜若 忠子  
済 大和田氏帰られて後、また松風。夜ニ入て皆々帰られる」(p706)
- 34.5.31「大和田氏へ五円」(弘方摘要、p709)
- cf 34.6.8「観世へ舞台開、十円」(弘方摘要、p710)
- 34.7.31「大和田氏へ金拾円、かたひら一反を贈る」(弘方摘要、p720)
- 34.11.8「大和田氏、二円五十銭」(弘方摘要、p737)
- 35.1.14「大和田氏来る」(p760)
- 35.1.22「来客、大和田氏」(p761)
- 35.1.28「来客、大和田氏」(p763)
- 35.3.4「大和田氏、二円五十銭」(弘方摘要、p769)
- 35.3.4「大和田氏へ表取替、金千疋」(「挿入紙」明治三十五年会計、p823)
- 35.7.2「大和田氏六月分、千疋」(弘方摘要、p791)
- cf 35.7.14「観世九番ゆるし、千疋」(弘方摘要、p794)
- 36.9.14「大和田氏、十円」(「受」方摘要、日記三<以下略>、p52)
- 41.7.5「禱会 午前十時始り、大和田先生着席、研究五年集會す」(p374)
- 42.7.15「貳円五十銭 大和田氏へ」(出金「明治四十二年会計」、p516)
- 42.12.20「金 千疋 大和田氏」(出金「明治四十二年会計」、p526)
- (出典) 日記二、p609～p794、日記三、p52～p526。汲泉1号～3号。

[附記]本稿は本学五十年史編纂時に筆者もはからずも委員の末席を汚し、自分なりに割当られたコラム辺りに掲載する心算の課題であった。しかし煩瑣な新学部設置申請業務と重なり、本編執筆すら覚束ない状況で残念ながら一時断念を余儀なくされた。今春、念願の長期無期限の研究休暇を賜り、期限を過ぎて恐縮ながら、かねての宿題を提出させて頂く機会を得たことにまず感謝申し上げたい。『跡見花蹊日記』解説に尽力された岩田秀行氏、植田恭代氏、五十年史編纂に尽力された泉雅博氏、在任中副学長として長らく公私両面でご指導賜った大塚博氏、それに本学に転校する際、彦根までお越し頂いた縁で花蹊の幅広い人脈に関して常に教示賜って来た嶋田英誠氏など、畑違いの門外漢で道に迷っていた筆者にまで暖かくご指導賜った文学部(旧)在籍の数多くの諸先生方に心から御礼申し上げたい。

注1) 拙著『昭和四十一年日本一周最果て鉄道旅』笠間書院、令和元年,p13。国学者としての落合の知名度と比し、ごく狭い領域かも知れないが、筆者の如き鉄道あるいは観光研究者にとって『鉄道唱歌』で著名な大和田建樹の存在は決して劣るものではない。

2) 拙稿「跡見流観光教育の創始と観光用画像資料の教材活用」『FDジャーナル』9号、跡見学園女子大学、平成22年3月,p142～145。

3) 『跡見花蹊日記第二巻』跡見学園、平成17年を「日記二」、同第三巻を「日記三」と略。

4) 12) 岡本かの子「池に向いて」『跡見学園一三〇年の伝統と創造』（以下単に「一三〇年」と略）平成17年,p38所収。

5) 6) 植田恭代「『源氏物語』からみる跡見女学校の教育—明治・大正期を中心に—」（以下単に植田①と略）『跡見学園女子大学文学部紀要』37号、平成16年3月,P27。43年3月辞任した典拠は大和田の教え子である井上幸子「校歌“花桜”作者 大和田建樹先生追憶」『汲泉』復刊第20号、昭和45年,P10。

7) 8) 植田 恭代「『跡見花蹊日記』からみるカリキュラム—落合直文との関わりにふれて」（以下単に植田②と略）『跡見学園女子大学文学部紀要』41号、平成20年3月 p11～12。

9) 近年も中村健治『「鉄道唱歌」の謎』（以下単に中村と略）交通新聞社新書、平成25年で、鉄道唱歌成立に関する中島の記述（中島幸三郎『鉄道唱歌物語：歌の旅行案内の生誕と作者をめぐる人間哀史』交日新書3、交通日本社、昭和39年）に誤りがあるとの批判が示されるなど、鉄道唱歌成立を巡って論争が続いているが、本稿では立ち入らない。

10) 中村氏は前掲『「鉄道唱歌」の謎』で詳細な大和田の年表を掲げるが、31年4月の帰省以後、33年5月の第一集刊行までの2年間に記載は2件のみ。跡見への招聘等はこの間の空白を埋めるもの。

11) 中村氏によれば大和田の日記類でも鉄道唱歌に触れた記載は一度（中村,p136）の由。筆者の推測では花蹊には大和田の鉄道唱歌での虚名を見越して招聘したのではないとの自負があったからか。

13) 跡見校友会誌『汲泉』3号、明治34年5月23日,P160。通説では花桜は「三十三年の春の卒業式以来歌われている」（前掲一三〇年,p41）

14) 数え年の61歳誕生日を還暦（本卦還り）と称して生まれ変わりを祝う近世の風習から考え、生徒らが花蹊に赤い衣装を贈るような意味合いで、「誕生日の歌」としての現・校歌を唱って贈ったのであろうか。

15) 大和田は無数の諸唱歌のほか、雙葉学園、浦和高等学校、旧制成東中学、大野市立有終西小学校等の校歌も作詞。

16) 『能楽』第2巻2号、明治37年2月,p68。大和田が主筆を務め「自ら能楽界の機関を以て任じ。流派に偏せず個人に党せず」（『発刊の辞』『能楽』第1巻1号,p1）を標榜して明治35年7月1日創刊。

17) 20) 23) 題意解説『碓引 光輪閣落慶開帳記念』再版、成田山新勝寺、昭和50年。

18) 大和田建樹「秋のゆくへ」『紀行文集旅路』地球堂書店、明治39年。35年8月大野屋を訪れ不動尊参詣、11月成田を再訪、「夕方よりは謡の会ありて。大野氏に招かれ。更蘭けたれば一夜の宿を借」（旅路,P533）りた。

19) 独力で能舞台を設けたほどの愛好者・大野市平は海老屋、若松屋等と並ぶ門前老舗旅館主。秋に発病直前の大和田が42年6月20日大野屋舞台開きで「熊野」を演じた最末期の舞台写真が伝わる。

21) 大和田が詞を練り、花蹊が揮毫した碓引を彫師が彫刻、三光堂が製本するのに約3ヵ月を要したとすると36年9月謝礼受領の辻褄が合う。

22) おおのひさつね、明治5年～昭和10年。明治33年時点で跡見女学校講師（『汲泉』1号、明治33年6月,P133）、明治37年持ち管は笛の雅楽師兼楽師、大正6年神宮神部署雅楽教授。